

江戸時代を通して女性に着用された小袖。小袖とは江戸時代、階層を問わず着用された衣服で、現代のきもの原型に当たるものです。当時の女性たちは階層こそ違えども、それぞれの美意識のもと、意匠・装いを工夫し楽しんでいました。

小袖雛形本は、小袖の模様を収録した出版物で、一般の書店で販売され、現代のファッション雑誌同様、読者である女性が単に見て楽しむだけでなく、呉服屋で小袖を注文する際にその中から模様を選び、注記された加飾技法を参考に、希望する小袖の仕様を決定するファッションブックとしても使用されていました。寛文6年（1666）に刊行された『御ひいなかた』に始まり、江戸時代後期初頭に至る約150年間に、およそ170～180種もが出版されました。

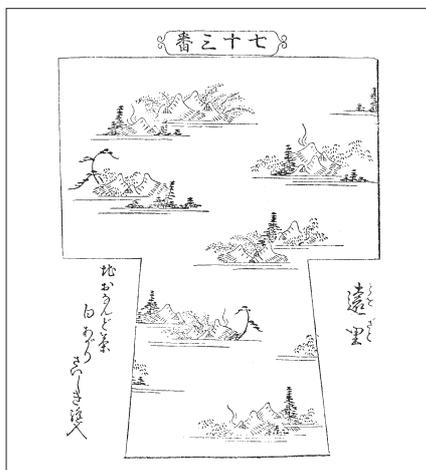
本展では、共立女子大学所蔵の17～19世紀の小袖と小袖雛形本とを同時に展示することで、江戸時代の女性の美意識を、より細やかに感じていただければと存じます。



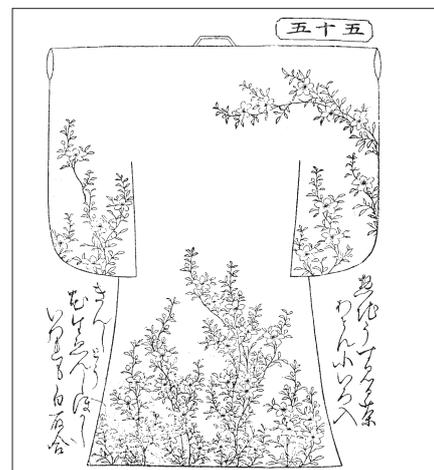
納戸紗綾地山水風景模様小袖
江戸時代 18世紀



鼠縮緬地風景模様振袖
江戸時代 19世紀



『雛形春日山』
明和5年(1768)年刊



『当流模様雛形宿の梅』
享保5年(1730)年刊